

小式部内侍「大江山生野の道の」考

——歌枕の機能、解釈、享受——

小山順子

はじめに

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ずあまのはしだて
(『百人一首』60)

小式部内侍は『百人一首』に採られたこの歌をもつて、歌人としての名を残している。この歌は、勅撰集には『金葉集』に採られている。『金葉集』再奏本から本文を引用しよう。

和泉式部保昌にぐして丹後にはべりけるころ、みやこに歌合侍りけるに、小式部内侍うたよみにとられて侍りけるを、定頼卿つぼねのかたにまうできて、「歌はいかがさせ給ふ、丹後へ人はつかはしてけんや、つかひまうでこずや、いかに心もとなくおぼすらん」など、たはぶれてたちけるをひ

きとどめてよめる

おほえやまいくのものみちのとほければふみもまだみずあまのはしだて
(『金葉集(再奏本)』雑上 550)

長文の詞書が、詠作事情を伝えている。母の和泉式部が夫の藤原保昌に伴って丹後国に下っている時、京で歌合があった。小式部内侍は、歌人として参加することになったが、そこに藤原定頼が、丹後へ遣いに人をやったのですか、遣いは帰って来ないのですか、心細く思っているのですか、でしょうか、と、揶揄した。小式部内侍が和泉式部に代作してもらっているのではないかと、とほめかしたのである。そう言うって立ち去ろうとした定頼を引き留めて詠んだのが、この一首であった。定頼の揶揄に対して、母からの手紙は見えていないと切り返し、またとつきの即詠——しかも、掛詞を用いた機知に富んだ一首をもつて答えたことによつて、自身に向けられた代作の疑いを晴らしたのであった。

この小式部内侍歌をめぐる説話は、『俊頼髓脳』『袋草子』『古今著聞集』『十訓抄』などに見られ、よく知られているものである。なお『俊頼髓脳』では、和歌本文が第二句「いくのゝさとの」、第四句「ふみもまだ見ず」となっている（定家本・顕昭本とも）。『金葉集』でも第四句は「ふみもまだみず」となっており（再奏本・三奏本とも）、『百人一首』と本文に異同がある。但し、他出文献⁽²⁾では全て『百人一首』と同じ本文であり、中世以後、一般的に流布していたのは「いくのの道の…まだふみも見ず」の形であつたと考えられる。本稿でも、『百人一首』の本文で考察を進めることとする。

冒頭に引いたように、藤原定家はこの小式部内侍歌を『百人一首』に採っている。その他、『定家八代抄』『八代集秀逸』『百人秀歌』にも選んでおり、秀歌として認めていたことが知られる。また『顕注密勘』の古今⁶⁵²番歌に関する定家注部分には、「其歌小式部内侍、和泉式部が一子、かたちすがた世にすぐれて、又『いくのゝみちの』とよみけん時のおぼえ、人のさまさこそは侍けめ」という記述が見られる。この後、小式部内侍が当時の貴公子達と艶名を馳せたことが記されており、定家の関心が、小式部内侍の和歌そのものだけではなく、彼女の生涯を彩る説話的な事柄にも向けられていたことが窺われる。

小式部内侍の名で勅撰集に入集する詠は八首。しかし、その中には別人や和泉式部の詠が混入しており、彼女の実作と考えられる和歌は、当該歌を含め、わずかに二首のみである⁽³⁾。当該歌以外の和歌についても、説話的要素の強い詠作事情のもとに詠まれたものが多く伝えられる。中でも当該歌にまつわる説話は、最も有名である。和泉式部の娘・小式部内侍と、藤原公任の息子・定頼のやり取り、しかも、その二人は別の説話によると恋人であつたらしい——華やかな異性関係で艶名を馳せ、また機知に富んだ和歌を即座に詠める才気煥発な女性というイメージが小式部内侍には定着し、この「大江山」詠の説話に関して、人間関係や人物像、説話としての内容などについて多くの研究が積み重ねられている⁽⁴⁾。

しかし、この小式部内侍の『百人一首』歌そのものについて、詠作事情や背景ほどの関心を寄せられていないように思われる。この一首について、新日本古典文学大系『金葉和歌集・詞花和歌集』（平1、岩波書店、川村晃生・柏木由夫他）では「大江山に行く、生野の道が遠いので、踏んでみることもまだしていませんよ、天の橋立は。そして、母からの手紙も見えていませんよ」と現代語訳されている。現行の注釈書において、一首の解釈に大きな差はない。本稿では、「大江山」「生野」の歌枕を用いて詠まれた歌を

検討することで、小式部内侍歌の享受と「大江山」「生野」の歌枕が一首に有する機能について考察したい。

歌枕「大江山」をどこに比定するかという問題は、しばしば組上に載せられてきた^(四)。都から丹後国を見やる視点からすれば、大江山を通過して生野を経て、天橋立へと到着するという順序に則っていると考えるのが自然であり、京と丹波との国境に位置する、老ノ坂峠である丹波国の大江山(大枝山)を指すと考えられる。更には、歌学書類(五代集歌枕・和歌初学抄・和歌色葉・内裏名所百首・八雲御抄)に「大江山」は、いづれも丹波国の名所として注されており、「大江山」といえば丹波国大江山を指すのが通例であったと見てよい。小式部内侍歌の「大江山」も、丹波国大江山と解するのが、現在では一般的である。

さて、小式部内侍歌の「大江山」は、一首の中でどのような意味を担っているのだろうか。まず重要であるのは、

先述のように、大江山が京と丹波との国境に位置し、境界を意味する地であったということである。

大江山が境界性を有する地であることは、いわば現実
に即した土地柄とでもいべき性格である。それでは、和歌
の上で、大江山はどのような修辭やイメージを伴つて用い
られてきたのであろうか。

今和歌六帖」第二273
 タマカヅラ 真玉葛
 タエムノコ、ロ 絶牟乃心
 ワレハオモハズ 我不思
 (巻十二 3071・寄物陳思、『古
 ・くに)がある。この歌においては、

大江山は「真玉葛」が繁茂する地として詠まれている。平安時代中期の例では、「なげきのみおほえのやまはちかけれどいまひとさかをこえぞかねつる」（『躬恒集』56さふのうた）や「かたときもみねばこひしきおほえ山なげきこえする人はよきかは」（『古今和歌六帖』第二・山⁸⁸⁷）に、「嘆き―投げ木」の掛詞を伴う詠み方が見られる。これは「大江山」が「大枝山」と表記されることにも表れているように、木材の産出地としての地名の名残を留めたものである。またこの二首は、大江山を「いまひとさかを越えぞかねつる」「越えする人はよきかは」と、ともになかなか越えられない、と詠んでいる。大江山が越えられない地であるという詠み方の背景には、木々が茂る山であるだけではなく、先述のような、不吉な地、禍々しい地としての境界性が意識されていると考えられる。

こうした大江山の表現が変容する転換点となったのが、小式部内侍歌であった。小式部内侍歌を享受し、その影響下で詠まれたと判断できる最も早い例は、久安五年（一一四九）の『右衛門督家歌合』で詠まれた次の一首である。

九月尽 二番 左 左京大夫

何方とさだめてまねけ花すすきくれ行く秋の行へだに
みん

右 能輔

おほえ山秋のいくののゆふ露はかたみにおける物にぞ
ありける

左歌、「行へだにみん」とおもふらんころろざし
ぞあはれなれども、行く秋をばなのまねくとい
ふ事、一定しりがたし。右歌は、「おほえ山いく
ののみちとほければ」とよめるこそきよけれ、
「秋」といふもじのはさまりて、いかにぞやきこ
ゆれども、中比の上手のよみたる事なれば、さだ
めてよくはべらん。又、「かたみの露」もおきた
まりてぞ候ひつらんかし。

行さきの心の程をくらぶればかたみの露やおきま
さるらん

判者の顕輔は、右方の能輔歌が小式部内侍歌を踏まえたものであることを指摘し、もともとの小式部内侍歌が「大江山生野の道の遠ければ」と詠んでいるのに比べ、能輔は「大江山秋の生野の」と、大江山から生野にそのまま詞を続けるのではなく、「秋の」という詞が挟まっている点について触れている。但し、小式部内侍の歌を踏まえているから許容されるという意であろう。

この能輔歌には、以後の「大江山―生野」詠を考える上で、重要な要素を二つ認めうる。まず一つ目は、「生野―行く野」を掛詞として用いており、それによって、小式部

内侍歌の「生野」が「行く野」であると解釈され、享受されてきたことを示していることである。頭輔の判詞に触れられているように、「秋」の詞が挟まっているが、それによって「生野」が「行く野」との掛詞であることが明瞭になっている。

二つ目は、小式部内侍歌を踏まえながら、「行く」主体を「秋」としていること、つまり、大江山を秋が去来する地として表現している点である。

この二つ目の要素である「秋」との関わりについて、能輔とよく似た詠み方が、『千五百番歌合』秋四にも見られるので、併せて見てみよう。

八百十五番 左 公経卿

これよりや秋はいく田のもりのかげすぐる時雨にちる

木の葉哉

右 寂蓮

たれもみなあかぬなごりぞ大江山秋はいくのゝかたをながめて

両首、心詞おかしくはみえ侍を、ともに秋のゆくによそへて、「いくた」「いく野」といへる、おなじ心には侍れど、金風の西へかへるによせて、「あかぬ名残ぞ大江山秋ぞいくのゝかたをながめて」といへる、ことほりかなひてやきこえ侍らん。

判者の定家は、左右ともに秋の「行く」を「生田」「生野」の地名に掛けて詠んでいる点を指摘しながら、金風（秋風の意）が西に帰ることに事寄せるには、寂蓮の方がより理屈に合っていると評価している。公経が詠んだ摂津国歌枕の生田杜も、生野と同様に京から見ると西に位置する。それを思うと、秋が西へと去って行くものという通念に沿って「秋の行く」に掛ける上で、どちらも不都合は無い。しかし、寂蓮歌の第二句以降「飽かぬ名残ぞおほえ山秋は生野の方をながめて」は、「名残ぞ覚え—大江山」「秋は行く—生野」と、掛詞を用いながら大江山・生野を詠み込み、更に結句「方を眺めて」によって、「大江山↓生野」の方角すなわち西に視点が向いていることを強く打ち出している。定家が寂蓮歌をより高く評価したのは、秋が西に向かつて去ることに、大江山から生野への方向と道のりを重ねた点にあったと考えられる。大江山が、生野・天橋立との組み合わせによって、京から丹波・丹後への方向を示す基点となる歌枕となったということは、先にあげた『右衛門督家歌合』の能輔歌のような小式部内侍歌の影響を受けて詠まれた初期の例から表れており、以後の「大江山」の表現に強い影響を与えているのである。

小式部内侍歌が有する技巧の新しさについて、藍美喜子氏¹⁵⁾は「気分としては、都から丹後などへ下向する哀愁

を揺曳させてきた大江山という地名の伝統を継承しつつも、一転「大江山―生野」という新しい地縁を結び、さらに名勝天の橋立を加えて計三か所の地名を畳み込んでゆく道行文的手法を編み出した点に趣向の目新しさがあつたのである」と説く。この藍氏の論に、私見を付け加えると、大江山は、単一の歌枕、一つの境界という、いわば「点」の歌枕であつたのが、生野・天橋立とともに詠まれることによつて、京から丹後国へ至るまでの道程という「線」を連想させる歌枕として新たに機能することになったのである、とも言えよう。なお、和歌において大江山と生野が組み合わされている例について、「……これらの大江山が、千丈ヶ嶽か大枝山か必ずしも明確でないが、生野（現福知山市）と詠み合わせているものは千丈ヶ嶽であろう」（日本歴史地名大系26『京都府の地名』昭56、平凡社「大江山」項）という見方がある。しかし、大江山と生野とが一続きのものとして用いられるのを、地理的に近いという理由に帰すことは、修辞技巧として見直す時、やや単純に過ぎると思われる。大江山と生野を、都から丹波・丹後への「線」上に位置する歌枕として道順に沿って取り上げる、つまり大江山が生野・天橋立とともに詠まれることによつて、京から丹後国へ至るまでの道程という「線」を連想させる歌枕として機能しているのであれば、生野と地理的に

近いという理由で、生野と共に詠まれる「大江山」を丹後の大江山と見る必要は取り立てて無いのである。

秋と大江山との結び付きは、「京―大江山―生野―天橋立」へと向かう西への動線が大江山に付随したことから生まれたものである。「秋のいく野」「秋はいく野」という詞続きも、「生野」が「行く」と掛詞となつてに留まらない。大江山・生野が京から見て西方にある歌枕であることに注目されていたことを示している。「をしめども秋はいく野のはな薄まねかばかへれくずのうら風」（『久安百首』¹²⁴⁵待賢門院安芸、秋）は、大江山を詠まず、生野だけを用いているが、発想は同じである。大江山が秋と結び付くという本意が形成されたことは、小式部内侍歌と直接に関わるものではない。しかし、小式部内侍歌が「大江山―生野―天橋立」の組み合わせによつて、京から西へ向かう方向性を打ち出したことから、単に京と丹波国との境界というだけではなく、西の境界である性格を強くしたためであつた。間接的にはあるが、やはり小式部内侍歌の影響は大きいのである。

二

小式部内侍歌が転換点となつたのは、大江山についての

みではない。歌枕「生野」もやはり、小式部内侍歌より前と後では、表現に大きな差異が見られる。「生野」が歌字書に表れるのは、『八雲御抄』が初出であり、「いく」〔小式部〕（巻五名所部・野）と、小式部内侍歌を勅撰集初出として示す。「生野」は、小式部内侍歌によって歌枕として定着したといってもよい。当該歌以前に「生野」が詠まれる先行例は、次の一首しか見られない。

ひとのくになるをんなに、ものなどいひてかへる
みちにやすむところにて、いく野といふところより
人をかへして

わかれにしほどにきえにしましひのしばしいくのゝ
野辺にやどれる
（『元真集』337）

この歌においては、第二・三句に「消えにし魂」とあり、「しばしいく野の」とあることから、「生野」は「生く」との掛詞として用いられていることが分かる。

しかし小式部内侍歌の後、「生野」は先述のように「大江山」との組み合わせで詠まれることが増え、また「行く野」との掛詞で用いられることが定着する。前節で挙げた「秋のいく野」「秋はいく野」がそうであり、例は枚挙に暇が無いほど多い。「生野」が「行く」と掛けられているという点については異論を差し挟む余地がない。しかし、「生野」の有する意味とは、それだけなのであろうか。

そこで考えてみたいのが、「生野」の地名から「幾」を連想する可能性である。歌枕「生野」に「幾」が含意されていると見なせる例は、決して多くはないが、以後の和歌に見出せるのである。

承安三年法輪寺歌合、草花

いろいろの花にたはれてみちとほみいくのはらに日
をくらすかな（『夫木和歌抄』秋二⁴⁵⁴¹実顕法師、秋華）

承久元年内裏十首歌合に、野徑露

道とほきいく野の霞いくへどもほどこそしらね春の夕

暮

（『新続古今集』春上27藤原信実）

この二首は、ともに「道遠み」「道遠き」が、小式部内侍歌の第二・三句「生野の道の遠ければ」を踏まえたものであると考えられ、「いく野」は歌枕「生野」を指すと判断できるものである。実顕歌に詠まれているのは、様々な秋の花と戯れながら旅をする様である。第三句以降「道遠みいく野の原に日を暮らすかな」とは、道が遠いために生野——幾つの野原を行って日を暮らしたのだろうか、の意と解せる。すなわち、初句「色々の」と呼応して、「いく野の原」とは「生野——行く野」だけでなく「幾野」とも掛詞となっていると考えられるのである。一方の信実歌は、承久元年（一二一九）『内裏百番歌合』が出典である。これは衆議判であるが、家隆が後日記述した判詞に「左、い

く野のかすみいくへともなくと待る、すこしまさるべくや
侍らんとて、為勝と評価されている。ここでは「生野」
は第三句「幾重とも」を同音反復で導く機能を持つている
のである。「生野」の地名の中に「幾」が喚起されること
を示しているよう。

歌枕「生野」に「幾」が結び付いていると判断できる例
は、管見の限りこの二首のみである。しかし、「いく野」
が「行く野」の意で用いられ、歌枕「生野」を指すと断じ
ることのできない場合であっても、同様に「幾」を同音か
ら導く例や、もしくは「幾つの野」の意で「いく野」を解
せる例が見出せるのである。

きみにわがあはでいくののいくたびか草葉のつゆに袖
ぬらすらむ
《風情集》51寄「野恋」

むらさめのたまぬきとめぬ秋風にいくのかみがくはぎ
のうへのつゆ

《拾遺愚草》2247建保元年内裏詩哥合、野外秋望

ささ枕いくののするにむすびきぬ一夜ばかりの露のち
ざりを
《統千載集》羈旅804宗尊親王「旅の心を」

『風情集』の一首は、先掲の信実歌と同様に、同音反復
で「幾度」を導くもの。定家歌は「村雨の露の玉を貰いた
ままに留めておかなく秋風に吹かれ、萩の上の露の玉は幾
つの野に渡つて磨かれたのだろう」の意。萩の上の露を、

秋風に吹かれて幾つもの野を旅して磨かれてきたものかと
見る歌である。宗尊親王歌は、第四句「一夜ばかりの」と
対比して「いく野」が詠まれており、「旅の枕を幾つの野
の末に結んで来たのであるうか、一夜だけの露のように儚
い契りを」の意である。宗尊親王歌は「行く野―幾野」の
掛詞として用いられているが、定家歌は、「幾野」が単独
でも和歌に詠まれる詞であることを示している。

また、「幾」が「野」を含む詞を修飾する例として、「い
く野山」(『宝治百首』3769・『伏見院御集』1786・『俊光集』
430)と「いく野原」(『伏見院御集』1735)もある。こうし
た例から、「生野」がその音から、「幾」を喚起して「幾
つもの野」を意味しうると考えられるのである。

更に注目されるのが、「生野」の同音異義語である「幾幅
(幾布)」が、院政期に和歌に詠まれ始めているというこ
とである。

『俊頼髓脳』には、次の連歌が収められている。

中納言殿

かりぎぬはいくのかたちしおぼつか
なとししげ
(後重)

わがせこにこそとふばかりけれ

「中納言殿」は藤原忠通、「俊重」とは俊頼の息子であ
る。『統詞花集』物名948には、「法性寺入道前太政大臣の

歌のもとを申していへりければ」の詞書で源俊重作の和歌一首として収められている。また、『散木奇歌集』には、同じ前句に付けた付句「しかさぞいるといふ人もなし」が収められている。忠通の前句は、「幾幅か裁ちし」——狩衣がどれ程の巾の布を裁つてできたものであるか、という問いに、「幾野か立ちし」を掛けて、幾つの野を立ち馴らしたのか、の問いを重ねたものである。この「幾幅」は、布の巾を数える単位「幅」(一幅はおよそ九寸一尺)に疑問を表す「幾」が付いた詞であり、院政期から連歌だけでなく和歌にも詠まれ始めている。俊頼の元永元年(一一一八)五月の詠作にも、「さみだれのはれせぬころはひきさらすたきのしらぬのいくのそふらむ」(『散木奇歌集』299「源中納言まさゝだのいゑのうたあはせしけるによめる」と、「幾幅」の例は見られる。

そして「幾幅」が和歌に詠まれ始めると同時に、「生野―幾幅」の掛詞が試みられているのである。

卯の花のさける垣ねは布さらすいくのさとの心ちこそすれ
『堀河百首』346 藤原顕仲・夏・卯花)

いかなる女のもとにかありけん、つかはしける
まことにや人のくるにはたえにけむいく野のさとのなつびきのいと
『金葉集(三奏本)』維上529 藤原兼房)
顕仲歌は、第三句「布さらす」に続き、「生野―幾幅」

の掛詞となっており、「卯の花の咲く垣根は、幾幅の布をさらす生野の里のように思われる」の意である。また兼房歌は、「来る―繰る」と「行く野―生野」の掛詞がまず指摘できるが、「繰る」「絶ゆ」「夏引の糸」と衣・糸関連の詞が用いられていることから、「幾幅」も縁語として響いていると見なせる。

またこの二首は、歌枕「生野」を『俊頼髓脳』の小式部内侍歌の本文と同じ「生野の里」で詠み込んでいる点にも注目される。俊頼と同時代には「生野」は「生野の里」という歌枕として和歌に詠まれていたのである。なお、小式部内侍歌を文学史上に留めるのに大きく寄与した、他ならぬ俊頼も「おもひかねいくのゝさと」をへだつればかすみをさへもうらみつるかな」(『散木奇歌集』恋上1096「はるのこひといへることをよめる」と、「生野の里」を詠んでいる。顕仲歌の出典『堀河百首』は長承二、三年(一一〇五、六)に詠進されており、兼房歌は、能因が永承年間(一一〇四―一一〇五)に編んだ『玄玄集』154にも採られている。生野を詠んだ和歌の中では古いものであり、前節で小式部内侍歌の早い影響例として取り上げた久安五年(一一四九)の『右衛門督家歌合』よりも、約半―一世紀遡る。「生野」は「生野の里」の形で、歌枕として注目され始めた。それは、歌枕「大江山」が小式部内侍歌によっ

て脚光を浴び、歌人たちが用い始めるのに先んじている。しかしその十二世紀前半における「生野」の表現は、その名称に「幾」を含むものとして、「幾幅」と掛けて用いられていたのである。

「生野」は新たな歌枕として注目され、様々な修辭が試みられていたのである。しかし、小式部内侍歌が広く世間に知られ、「生野―行く野」の掛詞が修辭として定着してからは、「生野―幾幅」の掛詞はほとんど用いられなくなる。但し中世にも、数は少ないものの、

きて見ればおほえの山のあなたまでいくのともなきふ
ぢばがまかな

『夫木和歌抄』秋⁴⁵⁰⁷ 源有仲、蘭「家集、蘭を」
あらしふくおほえの山のもみぢ葉はいくのにおれるに
しきなるらん

『夫木和歌抄』秋⁶²²⁷ 俊盛法師、紅葉「題不知」
のように、布・衣服関連の詞と詠み合わされ、「幾幅」との掛詞となっている例が見られるのである。

「生野―幾幅」の掛詞は、歌枕「生野」をいかに和歌に取り入れ、活かすか、表現を模索していた一環に過ぎないのかもしれない。しかし、この「生野―幾幅」の掛詞の例は、「生野」という地名の中に「幾」が含まれていると受け取られていたことを示しているのである。

「生野」に「幾野」が掛けられていることが、顕在する例は少ない。しかし生野がその音の中に「幾」を含み、「幾つもの野」をイメージさせる地名であることを考えると、以後の「生野」の詠に、広大な野を表現するものが多出する背景が分かりやすいのである。

小式部内侍以後、勅撰集における「生野」は、次の一首が初出である。

平治元年、大嘗会主基方、辰日参入音声、生野を
よめる

おほえやまこえていくのゝすゑとをみみちあるよにも
あひにけるかな

『新古今集』賀⁷⁵²
この一首は、大江山を越えて行き、生野の末が遠くまで道が続くように、行く末遠く続く政道の正しい天皇の御世に達したことだ、と詠んでいる。都から大江山を越えて生野まで、という地理的な関係は小式部内侍歌と共通しており、その道が遠いという表現も小式部内侍歌を念頭に置いたものである。

範兼歌は『大嘗会悠紀主基和歌』56番・666番(第四句「みちあるときに」)にも採られているが、『大嘗会悠紀主基和歌』には「生野」に「はるばると」が続き、広大な「生野」を詠出した歌が二首見られる。

寿永元年十一月十二日 主基丹波 甲帖正二月

生野辺春霞眇眇

安佐賀数美 多津也伊久野能 波留波留登 由久数恵

登乎岐 木見賀美与賀那

『大嘗会悠紀主基和歌』 842 藤原兼光

嘉禎元年十一月五日 主基方丹波国 甲帖正二月

生野松下有摘若菜之人上

千登世末弓 伊久乃乃須恵遠 波留波留登 万津乃古

賀介爾 和賀奈遠曾津津

(同1123菅原為長)

兼光歌は、「朝霞が立つ生野が遙々と続くように、行く末の遠い君の御代であることよ」、為長歌は「千年まで、生野の末が遙々と続くような長い時間待ちながら、松の木陰で若菜を摘むことだ」の意と解せる。いずれも、生野は広大な野として、天皇の御世の永続性を言祝ぐ「はるばると」を導くために詠まれている。生野の空間的連続性が時間的連続性に重ね合わされているのである。

こうした「生野」が遥かに続く広大な野であるという捉え方は、どこに起因しているのであろうか。「生野」という一つの地が広大な野というイメージを有していたこともあろう。しかし、これまで検討してきたことを踏まえると、「生野」はその音の中に「幾つもの野」を連想させるために、地名の中に数多の野が含意される歌枕であり、どこまでも続く野を喚起させたという背景が考えられる。

大嘗会和歌に詠まれる歌枕は、「先從^二国々^一注進所々名於行事弁^一、以下^二作者許^一。作者撰^レ便宜所々^一」、「各々可^レ避^二禁忌^一。」「(袋草子)上・大嘗会歌次第」に見られるように、前もって提出された中から作者が選び詠む。生野は、丹波国地名の中で、大嘗会和歌において最も多く詠まれており、丹波国を代表する歌枕であることが、八木意知男氏によつて指摘されている^(九)。また藤田百合子氏は、大嘗会和歌に詠まれる地名は所よりも名、そのものが問題となると論じる^(十)。では生野は、どのような点が大嘗会和歌にふさわしい地名であつたのだろうか。まず「生野」は『元真集』所収歌にも見られたように、「生く」を地名に含むため、活き活きとした命を象徴しうることが挙げられる。命の萌え出づる季節である春としばしば結び付けて詠まれることが、それを示しているよう。そしてもう一つの理由として、「幾」をその名に有することによって、広大にどこまでも続く野を表すことで、天皇の治国そのものを象徴することができる。生野とは、そのような象徴性を有する地名であるがゆえに、大嘗会和歌の歌枕として最適であり、繰り返し詠まれたと考えられるのである。

更に、範兼歌・為長歌は「生野の末」と詞を続けている。この「生野の末」という詞続きは、範兼と同時代の平親宗に「さのみやはおもひいく野のすゑになほ色もつきせぬい

はつつじかな」(『親宗集』20「月歌合に、躑躅連路といふ心を」)の用例がある。先後関係は不明であるが、この二首が早い例である。その後、新古今時代に流行した表現であり、新古今歌人、特に雅経による用例が多数見られる。「生野の末」は、小式部内侍歌以降の生野詠にしばしば見出せ、生野詠の特徴ともいえるものである。それは「生野」の中に、歌人達は幾つもの野が連なり、広がる様を連想したためであつたのだろう。それゆえに、「生野」は、視界の及ぶ範囲に広がる、もしくは行く先の見えない程の広大さ・遙けさを有する地として、「眼前に広がる空間の延長線上の、最も遠く離れた周縁」(五)を示す「末」と結合することが増したと考えられるのである。

生野も大江山と同様に、小式部内侍歌によって注目を集めた歌枕である。院政期においては「幾幅」との掛詞で「生野の里」と詠まれるものも見られたが、その後は大江山との結び付きのもとに、「生野―行く野」の掛詞がその修辭の中心となつた。また前節に述べたように、大江山は小式部内侍歌の後、単一の歌枕、一つの境界としての「点」を意味するのみならず、「京―大江山―生野―天橋立」の道程という「線」を喚起させる歌枕となつた。同様のことが、生野についても言えよう。「生野」の音から「行く野」が旅路を意味し、「幾野」が遙かに続く野を意味するという、

二重の連想が音によって喚起されたと考えられ、京から大江山という西の境界を過ぎ、天橋立へと到る道程そのものが「生野」には象徴されているのである。

この点を勘案するならば、小稿の冒頭に述べたように、『俊頼髓脳』においては第二句が「いくのゝさとの」であつたのが、『金葉集』以後、「生野の道の」で定着した理由が理解される。「生野」が単に、京から天橋立へと到る際に通過する「点」を意味するに過ぎない歌枕であるなら、「生野の里の」でも構わない。しかし、天橋立までの長く遠い道のりを「生野」が象徴するとすれば、「線」を連想させる「生野の道の」である方が、より適切であり、また自然であると受け止められたためと考えられるのである。

三

「生野」がその地名の中に「幾」を有することによって、幾つもの野、すなわち広大な野を連想させる地であつたのではないか、と考えてきた。こうした、「生野―幾野」の掛詞が連想される背景を、今ひとつ検討したい。

それは、大江山が「多し」と掛けて用いられることがあるということである。これは、藤原清輔『和歌初学抄』所名に「^{丹たん}波^は おほえ山 ^多ヲホカルコトニソフ」という記述が

あり、大江山の修辭として院政期には定着していたことが窺われるものである。

この掛詞は、小式部内侍歌以前から見られたものでもあった。例えば、次の例を見てみよう。花山院を弓で射るという事件を起こした藤原隆家が、播磨国へと流される折に、大江山において和歌を詠んで中宮定子に送るくだりである。

中納言殿は京出ではてたまひて、丹波境にて御馬に乗
らせたまひぬ。御車は返し遣はす。年ごろ使はせたま
ひける牛飼童に、「この牛はわが形見に見よ」とて賜
へば、童伏しまろびて泣くさま、ことわりにいみじ。
御車は都に來、わが御身は知らぬ山路に入らせたまふ
ほどぞいみじき。大江山といふ所にて、中納言、宮に
御文書かせたまふ。「ここまでは平かに参で來着きて
はべり。かひなき身なりとも今一度参りて御覽ぜられ
でや止みはべりな」と思たまふるになむ、いみじう苦
しうはべる。御有様のゆかしき」など、あはれに書き
つづけたまひて、

「憂きことを大江の山と知りながらいとど深くも入
るわが身かな

となむ思たまへられはべる」など書きたまへり。

《栄花物語》巻五・浦々の別れ

京から丹波への境界地である大江山で、京を離れて「知らぬ山路に入らせたまふ」隆家が我が身を嘆く内容の歌である。この歌について、「大江」は「^{おほえ}覚え」と掛けられていると解されるのが主であるが、第一節で述べたように、大江山が大枝山、すなわち木々の多く繁る山である、という通念に依るならば、「憂き（木）ことを多し覚え——大江の山」という連想によって、詞が続いていると解せる。大江山の古い用例「なげきのみおほえのやまはちかけれどいまひとさかをこえぞかねつる」『躬恒集』56さふのうた）「かたときもみねばこひしきおほえ山なげきこえする人はよきかは」『古今和歌六帖』第二887山）も同様の連想である。

こうした「嘆き・憂き—木—多し覚え—大江山」の連想による掛詞は、小式部内侍歌の後、『資賢集』所収歌にも見られる。

丹州に籠居之時、述懷の心を

なげきこそおほえのやまとつもりぬれいのちいくのゝ
ほどにつけても

(16)

よのなかのこゝろづくしをなげくまに我身のうさはお
ぼえざりけり

(17)

おなじころ、源三位入道のもとへ申つかはし、
いまはさはきみしるべせよはかなくてまことのみちに

まどふ我が身を

(18)

返し

ことのほおほえのやまとつもれどもきみがいくのに
えこそちらさね

(19)

この四首は、源資賢が丹波国に蟄居していた折のものである。治承三年（一一七九）に平清盛が後白河院近臣を罷免し、親平家の人々を登用した際に、院近臣であった資賢も追放された（上三〇）。丹波に籠らねばならなくなった我が身を嘆き詠んだ歌が16・17で、頼政と交わした贈答歌が18・19である。中でも16と19は、「大江山」と「生野」が共に用いられており、小式部内侍歌の影響下で詠まれたものであることが明瞭である。16・19共に「大江山」には「多し」が、16には「嘆き」には山の縁語である「木」が掛けられ、また19の「言の葉」の「葉」も木の縁語である。更に「生野―生く野」と掛詞になっており、修辞を凝らした一首となっている。この二首は、小式部内侍歌から影響を受けながら、その掛詞の修辞を「生野」だけではなく、小式部内侍以前からの伝統にも沿って「大江山」にも用いたものである。

大江山は、小式部内侍歌よりも前から、「多し」と掛けて詠まれることが多かった。しかし、それらは「大江山―多―覚え」という連鎖を生むことが主であり、また「大江

山」の産出物である「木」を音に含む「嘆き」等を詠み込んで用いられる表現技法であった。しかし、それらの連鎖を伴わなくとも、「大江山」が「多し」と掛けられるようになるのである。

おもふことおほえの山に世の中をいかにせましと三声
なくなり

『永久百首』

699 兼昌、雑・猿

この歌は、初句「思ふこと」が「多し」から「大江山」へと掛詞で続いている。平安中期までの用例が「覚え」を「大江山」の地名に含めていたのと異なり、「覚え」に当たる「思ふこと」は、「大江山」の詞の外に出て、独立している。それによって、「大江山」が「おほえ」ではなく「多し」と掛けられていることが明らかである。「大江山―多し」の掛詞は、既に「木」との連想を離れて、「大江山」の地名から導かれる修辞として確立していることが知られるのである。

中世以後の名所詠の規範と仰がれた『内裏名所百首』の大江山詠（上三三）にも、「大江山―多し」の掛詞を用いた例が見られる。

五月雨のはれぬ日数やおほえ山いましてさうぎつ苔の下

水

(321 知家、夏・大江山)

夏草のしげみの露はおほえ山こえていくのゝ末もとを
ゝに

(322 範宗、同)

この二首は、知家「日数や大江山」・範宗「露は大江山」と、「大江山」に「多し」のみを掛けている。「大江山」が地名に「多し」を含み掛詞を形成することは、院政期から鎌倉時代にかけて、『和歌初学抄』にも記載があるように、常套的な修辭として定着していたのである。

すなわち、「大江山」がその名の中に「多し」という、数量を意味する語を連想させる地名であることも、「生野」が「幾野」を喚起させる一助となったのではないか、という効果が考えられるのである。そして、「多し」は「幾野」を修飾する機能を有するのではないか。つまり小式部内侍歌が「大江山を越えて行く数多くの幾つもの野」と解されていたという享受の可能性を提起しておきたい。

結びに

小式部内侍歌は、大江山と生野を歌枕として定着させる和歌となった。更に、大江山と生野は、一首の中に共に用いられることが定型となる。すなわち、大江山と生野の組み合わせは、旅人が遙か遠い地を目指して通過する地と広大な野をイメージさせる歌枕となり、「大江山生野の道の」は、山野を越えて遙々と行く旅そのものを象徴していると解せるのである。

「大江山―多し」「生野―幾野」の詞統きは、越えて行かねばならない多くの野を連想させ、第三句「遠ければ」と収斂して、小式部内侍と母・和泉式部の間を隔てる遙かな道のりが脳裏に浮かぶ。このように、「大江山」「生野」に道のりの遠さを読むという読解は、実は新しいものではない。当該歌に付された古注釈には、同様の読解を示すものがある。下河辺長流『百人一首三奥抄』・契沖『百人一首改観抄』が「大江山といへば大山と聞え、生野といへばいくばく遠き野と聞ゆる也」と注して以降、この解釈は継承されていたのである。この指摘は、親阿『百人一首諺解（小倉幽玄抄）』所引の頓阿説として「いく野とは生野と書り。いくばくの心にとれる也」とある注にも通じており、頓阿から見られるものであったらしい。長流・契沖の説は、大菅白圭『小倉百首批釈』に「敬仲云。大江山といへる大なる山と聞こえ、幾野といへば許多の野と聞こゆ」、岡本保孝『百首要解』に「或は大きな山をこえ、あるはいくばくの野を過て」、賀茂真淵『百人一首うひまなび』に「或は大きな山をこえ、あるはいくばくの野を過て」と継承されている。長流・契沖では「いくばく遠き野」とあるが、それが「許多の野」「いくばくの野」と、野を幾つも越えるようになっている。吉海直人氏^(十四)は当該歌について、「生野（「幾つもの野」も掛け

「られているか」と消極的に示すに留めているが、この解釈は『百人一首』の近世注においては、広く行き渡っていたと言ってもよい。鈴木弘道氏^{（十五）}は、『百人一首』の近世注を援用して、当該歌の上句の意を「大きく高い大江山を越えて行くべき広野続きの生野の道」「ヲ通ヲネバナリマセンガ、ソノ道」が遠いので」と訳している。管見の限り、当該歌をこのように解釈するものは、この鈴木氏の論文のみである。しかし、近世注がそのまま中世における解釈と見なすことはできない。契沖は大江山を「大なる山」、すなわち大きな山と解している。しかし中古から中世にかけての「大江山」の用例において、「大江山」を「大きな山」と明らかに掛けていると判断される例は管見に入らない。また『和歌初学抄』に「おほえ山 ヲホカルコトニソフ」の記述があり、実作においても「多し」の意が含まれる例が多いことを顧みると、あくまでも中世における解釈に限れば、「多し」を掛けると見ておくのが穏当であると思われる。

しかし近世の『百人一首』注釈が示唆するのは、「大江山」「生野の道」の音から、掛詞を汲み取る享受である。「大きな山」「多し」と、そこから汲み取る意は異なっているが、音から連想を導いている姿勢は共通する。その点において、「大江山」「生野」の地名が有する喚起性^{（十六）}

は、古来根強くあったといえよう。吉野樹紀氏^{（十七）}は、小式部内侍歌の核心が掛詞にあること、そして「和歌の核心を形成するという掛詞の特質は、小式部内侍の和歌のような機知の歌や、やりとりの歌においてこそ生かされるものといえよう」と述べる。掛詞の妙によって注目され、そこに眼目があると見なされてきた小式部内侍歌は、享受者に地名から様々な連想を紡ぎ出させてきた一首であったのではないかと想像されるのである。

以上に検討してきたことは、小式部内侍が歌を詠出した時点で、そこまでを念頭に置いたものであったと主張するものではない。そもそも、この小式部内侍の歌を有名にした説話自体が、事実かどうか疑われており、虚構の可能性が示唆されているのである^{（十八）}。しかし、この小式部内侍歌を即詠の名歌として、歌学書や説話集によって享受してきた読者たちは、「大江山生野の道の遠ければ」という上句によつて、都から天橋立への、または小式部内侍と和泉式部の間を隔てる距離の遠さを思い描いた。現代の注釈において、掛詞の指摘は「大江山を行く生野の道」と「行く」との掛詞にのみ限られ、『百人一首』の近世注が指摘した「大江山」「生野」の地名が有する喚起性は、解釈から漏れてしまい、顧みられなくなっている。しかし、「大江山」と「生野」が、その名から、数量を意味する「多し」「幾

を連想させることによって、遙々と続く旅路を表現してきたことは、中世以後の歌枕「大江山」「生野」の表現の展開を考える上で重要であると考えられるのである。

〔注〕

(一) 袋草紙・和歌初学抄・無名草子・百人秀歌・定家八代抄・八代集秀逸・時代不同歌合・女房三十六人歌合・十訓抄・古今著聞集・歌枕名寄。

(二) 鈴木一雄「小式部内侍」(『国文学 解釈と鑑賞』昭35・8)、三木紀人「亜流の世代のアイドル——小式部」(『国文学』20—16、昭50・12)。なお、小式部内侍作と認められるもの一首は、『後拾遺集』雄三¹⁰⁰²。

(三) 本稿で取りあげるもの以外にも、以下のような先行研究がある。大島秀男「歌詠みの覚え——小式部内侍の場合——」(『平安朝文学研究』3—1、昭46・8)、橘りつ『和歌威徳物語』続考——小式部内侍の説話をめぐって——(『文学論藻』52、昭52・12)、浅見和彦「小式部内侍説話考——『古事談』『宇治拾遺物語』所載話を中心に——」(『成蹊国文』22、平1・3)、古瀬雅義「小式部内侍「大江山」歌説話で語られるもの——視点のずれによる藤原定頼の役割の変化——」(『国語国文論集』25、平7)、本田佳子「小式部内侍の研究——人物像を中心に——」(『古典文学研究』8、

平12・12)、菅原利晃「小式部内侍「大江山」歌説話における教訓——「即詠」と「証」としての歌徳説話——」(『札幌国語研究』7、平14)、高橋貢「鑑賞 説話文学——小式部内侍「大江山いくのの道の遠ければ」歌をめぐって——」(『並木の里』56、平14・6)、武田早苗「小式部内侍「大江山」歌の背景」(『相模国文』30、平15)

(四) 丹波国大江山を指すと考える説に、池田和子「二つの大江山(京都の老の坂峠と与謝の大山)」(『宝生』13—2、昭39)、川上富吉「大江山いくのの道」考——丹波大枝山説の再確認——(『日本文学風土学会紀事』2、昭44)、糸井通浩「歌枕「大江山」考——小式部内侍の百人一首歌をめぐって——」(『京都教育大学国文学会誌』20、昭60・6)、丹後国大江山を指すと考える説に、馬淵一夫「大江山と生野」(『解釈』2—9、昭31・9)がある。

(五) 高橋昌明『酒吞童子の誕生 もうひとつの日本文化』(文庫版・平17、初版・平4、中央公論社)第一章(補説1)「大枝山の大江山」、同「境界の祭祀——酒吞童子説話の成立——」(日本の社会史2『境界領域と交通』昭62、岩波書店所収)

(六) 松岡心平「境界としての大江山」(『日本古典文学紀行』平10、岩波書店)

(七) 藍美喜子「掛詞と縁語——小式部内侍歌覚え書」(『小倉百

人一首の言語空間——和歌表現史論の構想——』平1、世
界思想社 第二章2d)

(八) 底本(冷泉家時雨亭本)、第二句「いくのゝみちを」。関根
慶子・大井洋子『阿波本 散木奇歌集 本文校異篇——本文
・校異と集注——』(昭54、風間書房)によると、諸本「い
くのゝ里の」。底本の誤写と推測し、校訂した。

(九) 八木意知男『大嘗会和歌の世界』(昭61、皇學館大學出版
部) 第4章八「丹後国歌枕の総括」

(十) 藤田百合子「大嘗会屏風歌の性格をめぐって」(『国語と国
文学』55—4、昭53・4)

(十一) 權沢綾「歌語「すゑ」の表現空間——万葉から新古今へ
——」(『武庫川国文』65、平17・3)

(十二) 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』(昭53、笠間書院)
第六章II「二十四 資賢」参照。

(十三) 『内裏名所百首』の大江山詠については、拙稿『内裏名
所百首』四季部の設題と名所表現」(『和歌文学研究』93、
平18・12)でも検討を加えたので、合わせて参照されたい。

(十四) 吉海直人『百人一首の新研究——定家の再解釈論』(平
13、和泉書院)

(十五) 鈴木弘道「無名草子的小式部内侍評言私注 III」(『相愛
大学研究論集』5、平1・3)

(十六) 新井幸恵「小式部内侍攷——「大江山」詠歌を巡って

——」(『東洋大学大学院紀要(文学研究科)』39、平15・2)、
兼築信行「小式部内侍の「大江山」の歌について」(『赤羽
淑先生退職記念論文集』平17・3、赤羽淑先生退職記念の
会)は、大江山には大江氏の姓字が喚起されるという読み
を提示している。この読みも、大江山の地名からの連想を
指摘するものである。

(十七) 吉野樹紀「歌語「大江山」の和歌史的展開」(『沖繩国際
大学 日本語日本文学研究』9—1、平16・12)

(十八) 萩谷朴『平安朝歌合大成(増補新訂)』二(平7、同朋
社出版)「二一八〔寛仁末治安頃〕或所歌合」

和歌本文・歌番号は、特に記さない限り新編国歌大観に、『万葉
集』は旧編国歌大観番号に依る。他の本文引用は以下の通り。濁
点・句読点はわたくしに付した。『千五百番歌合』：有吉保「千
五百番歌合の校本とその研究」(昭43、風間書房)、『内裏名所百
首』：京都大学国語国文資料叢書39『内裏名所百首 曼殊院蔵』
(昭58、臨川書店)、『万葉集』：『校本万葉集 別冊一―三廣瀬
本』(平6、岩波書店)、『新古今集(文永本)』、『元真集』、『散木奇
歌集』、『資賢集』、『拾遺愚草』、『和歌初学抄』：冷泉家時雨亭叢書
(朝日新聞社)、『八雲御抄』：『八雲御抄 伝伏見院筆本』(平17、
和泉書院)、『願注密勘』：『日本古典文学影印叢刊22『願注密勘』
(昭62、財団法人日本古典文学会)、『袋草子』：『日本歌学大系(風

間書房）、『栄花物語』：新編日本古典文学全集（小学館）、百人一首注釈：百人一首注釈書叢刊（和泉書院）

〔付記〕 本稿は、俊頼髓脳研究会（相愛大学・鈴木徳男氏主催）において発表した内容をもとに、加筆し執筆したものである。研究会の席上で、多くのご意見や示唆を頂戴した。深く御礼申し上げます。

げます。

なお本稿は、平成十八年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（こやま じゅんこ・日本学術振興会特別研究員）